

[招待：実践報告]

地域研究の視点から捉える 言語教育の位置付け

SFC ドイツ語教育における実践事例

Acquisition of Foreign Languages from the Perspective of Area Studies

In a Case of German as a Foreign Language Instruction at SFC

藁谷 郁美

慶應義塾大学総合政策学部教授

Ikumi Waragai

Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

Correspondence to: ikumi@sfc.keio.ac.jp

Abstract:

本稿では SFC のドイツ語教育を地域研究とのつながりから捉えなおす。初級レベル科目からスキル・講義科目、海外研修、フィールドワーク活動に関連する事例を交えつつ、言語習得活動が研究活動につながる接点を、教材開発と運用・実践の面から提示する。母語以外の言語学習が複言語・複文化的視点の獲得を導き、学習者の問題意識に多面的な相対化を促す点に重点を置く。

This paper reexamines the instruction of German as a foreign language at SFC through its connections to area studies. Using examples from introductory and skills-based courses, as well as overseas training and fieldwork, it outlines where language acquisition intersects with research on developing and implementing teaching materials. The discussion highlights the significance of learning a language distinct from one's native tongue, emphasizing how this process fosters a plurilingual and pluricultural perspective while encouraging a nuanced relativization of the learner's problem awareness.

Keywords:

ドイツ語教育、地域研究、教材開発と運用、
フィールドワーク

German as a foreign language, area studies, developing and
implementing teaching materials, fieldwork

1. はじめに

多様な価値観と接触する言語教育の現場は、現代社会が取り組むべき課題にあふれている。地域社会が抱える課題を理解することは言語学習に密接につながる。その視点は言語習得プロセスのなかで「学びの気づき」として喚起され、育まれる。本稿では、言語教育と地域研究の関係性を、SFC のドイツ語教育において実践されている複数の事例を通して提示する。具体的には授業として実施するフォーマル・ラーニング域内での実践内容、および授業の枠を超えたインフォーマル・ラーニング活動としての実践事例である。本稿では、地域研究の視点から SFC のドイツ語教育全体を捉え直すことにより、言語教育の現場に見られる学生の「学び」の活動が、研究活動への視座を開くまでのプロセスを提示する。

言語教育をコミュニケーションスキルの獲得として捉えるアプローチは、1990 年の SFC 開設以来、常に重要視されてきた。従来の伝統的な知識構築型の外国語教育の枠を破り、自己発信できるコミュニケーションアプローチを強調した SFC のインテンシブコース設置の理念は SFC 開設当初、他の教育機関に対して多大なインパクトを与えた。特に日本の高等教育における明治以降のドイツ語教育の位置付けは、知識の構築、教養の育成に重点を置く傾向が強く、SFC のドイツ語教育実践の発信は、言語運用能力とは何か、その意味を問い直す教育改革の問題提起につながった¹⁾。

言語運用能力の習得プロセスは、学習者の学習目標をどこに設定するのかによって異なる。学習者の言語運用能力が CEFR²⁾ の C1 あるいは B1-B2 レベル以前の段階でも、研究のための学習目標を初期の段階から具体的に持つことは有益である。学習言語を使って「何を」やりたいのか、その「何を」の動機付けが大学での研究に結びつく。SFC のドイツ語教育では、この学習目標につながる言語学習活動を既に A1 レベルの初級授業から導入している。ドイツ語を初習言語として大学で学び始める場合、大半の学習者がそれまで母語の日本語や既習言語（大抵の場合は英語）で情報を収集し、知識を構築してきたわけだが、その視野の射程は、別の視点から見直される、つまり相対化される機会を得る。ドイツ語を通して見えてくるグローバルな課題を認識し、気づきを得ることは、それぞれの学習者の複言語・複文化的な視野を育むきっかけにつながる。

以下に、SFC におけるドイツ語教育が、どのように学生の研究活動に結びつく学習環境を構築しているのか、という視点から、学習教材開発、授業構成、授業運用手法を取り上げる。特に SFC において有機的に連動する地域研究との接点が、すでに初級レベルの学習段階で教材および授業構成に内在する点を特徴のひとつとして呈示したい。

2. SFC ドイツ語教育の理念とコース設定

図1が示すのは現在のSFCにおけるドイツ語教育の全体図である³⁾。学習環境構成として初期レベルのドイツ語科目コース群「ドイツ語インテンシブ」(レベル1-3)、「ドイツ語ベーシック」(レベル1-2)⁴⁾、が設置されており、そこでA1-A2レベル(SFCのドイツ語教育ではA1.1・A1.2・A2.1・A2.2に細分化されたレベル設定を取っている)に相当する運用能力が養われる。この段階以降は、レベルB1(B1.1-B1.2)を目指す「スキル科目」と呼ばれる科目群が用意されている。これらは、B2レベルに相当する「コンテンツ科目」(ドイツ語でおこなわれる講義科目)につながる。後者はSFCにおいて先端科目群に位置付けられており、言語運用能力の習得から専門領域の研究へと科目の位置付けが変化する。

SFCのドイツ語教育ではコミュニケーションアプローチに重点を置き、特に初級レベル(図1における「インテンシブ」および「ベーシック」科目群)では自己発信ができる言語運用能力の育成を、中上級レベル(図1における「スキル」および「コンテンツ」科目群)では特定のテーマに特化した言語運用能力の獲得を、そして実践レベルでは、海外研修やフィールドワークを通じた独自の研究遂行の手段として有用な言語運用能力の獲得に重点を置く。SFCで開発されたドイツ語教材は、たとえ教室内のフォーマル・ラーニングに適用されるコンテンツであっても、教室内の学びを前提とせず、オーセンティックな「現実の場」を反映させることを前提で作成されている。グローバルな視点から社会が抱える問題は何か、それぞれの地域が抱える課

題は何か、といったリアルな状況を教材コンテンツに反映させることは、高等教育機関の学習者が言語を学習する際に有効な言語学習の動機付けにつながる。言語学習レベルが初級であっても、扱うテーマは学習者の問題意識と乖離せず、研究を推進する形で提供されることを重要視する。

3. フォーマル・ラーニング域内におけるドイツ語教育

3.1 初級の言語習得過程における問題意識の喚起

初級レベルのドイツ語授業において地域研究への関連性がどのように位置付けられているのかを以下に示す。ドイツ語初級レベルについては、その学習目標はレベルA2までの基本的なドイツ語運用能力の習得にある。その際の教材コンテンツでは学習者が現実の社会で直面する課題に関連したテーマが重点的に扱われる。図2は2024年現在、SFCの初級レベルであるG1およびG2のために開発・運用している教材『Module 1』の一部を示したものである⁵⁾。同図右はドイツの労働人口と大学生の割合、大学生の時間の過ごし方を資料で示した上で日本の状況と比較しながら考えさせる課題である。同図左は大学生のキャリア形成として海外でのインターンシップを遂行することを想定し、学生たちの関心対象にある分野と結び付けた活動をシミュレーションさせる課題である。図3が示すのはG3のために開発し、授業で使用している教材『問題発見のドイツ語 Modelle 3』の一部である⁶⁾。ここではエネルギー政策をテーマにしたドイツの風力発電(„Windkraftwerk“)に関する事例を取り上げ、学習者が日本との比較を踏まえて議論することが課題である。

これらの教材事例にみられるように、ドイツ語の各初級レベルにおける学習を通して、研究分野と結びつく可能性のあるテーマが学習者に示される。授業の中で取り上げられるこれらの課題は、教材として提供されるデータを扱うにとどまらず、学習者自身がドイツの統計局データにアクセスしたり、日本の各省庁が公開する白書等の資料を調べたりする活動を通して遂行することを前提としている。このようにSFCのドイツ語教育では教材開発および授業での運用に際して、常にそのテーマや学習活動がその時々々の社会情勢や学生の問題意識に紐付けされることを重視する。これらの活動を通して、学生にとってドイツ語圏でのフィールドワークや資料収集は現実的な活動となる。

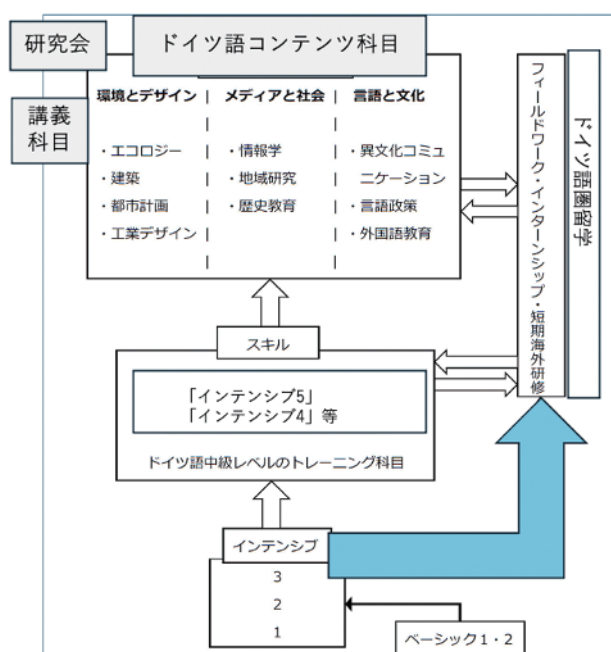


図1 SFC ドイツ語関連科目の全体図 (2024年9月1日現在)

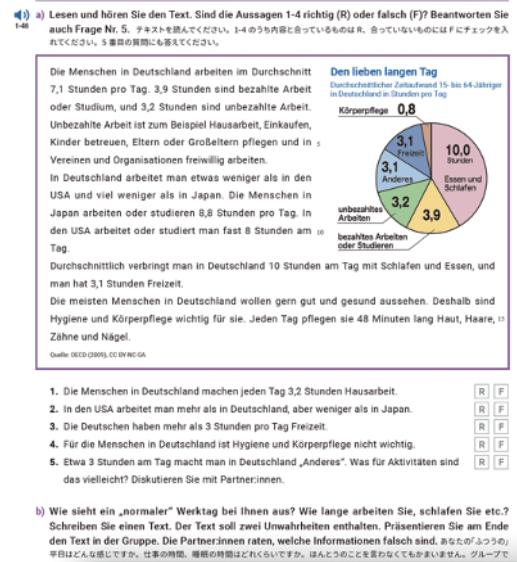
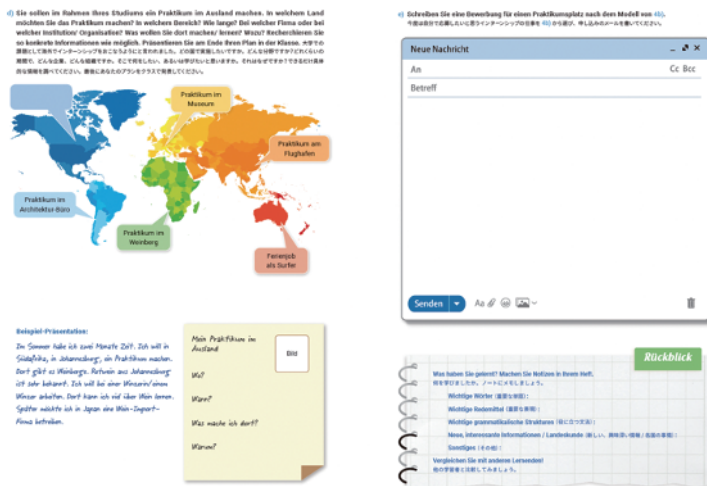


図2 G1の教材『Module 1』で取り上げられる国際インターンシップのプロジェクト課題(左)およびドイツ語圏の労働に対する意識について(右)の例

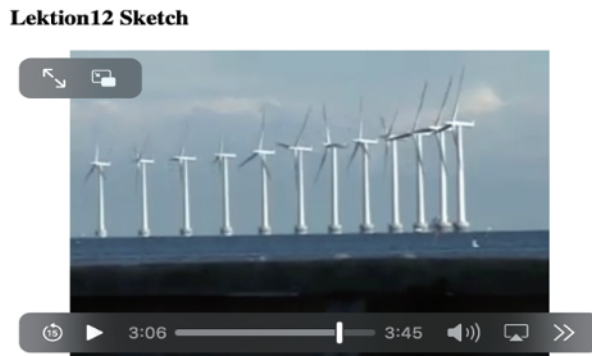
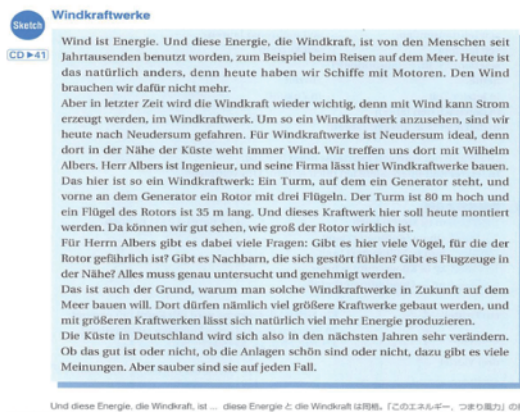


図3 G3の教材『Modelle 3』で取り上げられるドイツ語圏の代替エネルギー・風力発電についての課題テキスト(左)と動画教材(右)

3.1.1 学習活動「プロジェクト」 („Projekt“) の体験

これら初級コースの授業には、「プロジェクト」と呼ばれる研究課題の遂行も組み込まれており、グループワーク形式でおこなうものから、独自の研究テーマに近づけた個人研究型のものまで多様なアプローチで実施される。履修者は授業中にデータ収集、内容分析、グループ内ディスカッションやプレゼンテーションなど、一連のプロセスをドイツ語で体験する。G1 から G3 のレベルまで、それぞれの言語運用能力に応じて準備内容は異なる。授業ではテーマ設定に関するドイツ語による情報収集のための手法、検索媒体や検索方法等を、実践を通しておこなう。図4は、これまでのプロジェクト実践内容を紹介したドイツ語研究室のWeb ページである⁷⁾。ここでは初級レベル G1-G3 および B1-B2 の履修者が、それぞれ学習中のドイツ語を使って何らかのコンテンツを作成していることが見られる。周囲の地域を取り上げたツーリズム、移民受け入れ問題、異文化間の公共ルール規定の相違、異文化間の習慣、文学、

建築、メディア等、そのプロジェクトテーマの射程は多岐に亘る。学生は実際にこれらのテーマについて情報収集から発表資料の作成までを授業中に準備し、履修者全員の前でドイツ語によるプレゼンテーションおよび質疑応答をおこなうことが義務付けられている。テーマによって必要となるテクニカルタームや発表の際にスキルとして用いる語彙表現は、学習者が自分の自己発信を実現する活動に直接結びつく。このように、言語運用レベルが上がってから専門性のある領域に学生を導くのではなく、初級レベルの時点からドイツ語運用能力が研究活動に結びつけられること、それを実行することへの「意識」を喚起することが重要であるとする。また、学生たちのプロジェクト活動をドイツ語研究室のHP にアーカイブすることにより、ドイツ語をこれから学習しようとする学生に対して「ドイツ語を使ってこんなプロジェクトが実施できるのか」という、研究手段として有効な言語習得への気づきをもたらすことにも繋がる⁸⁾。

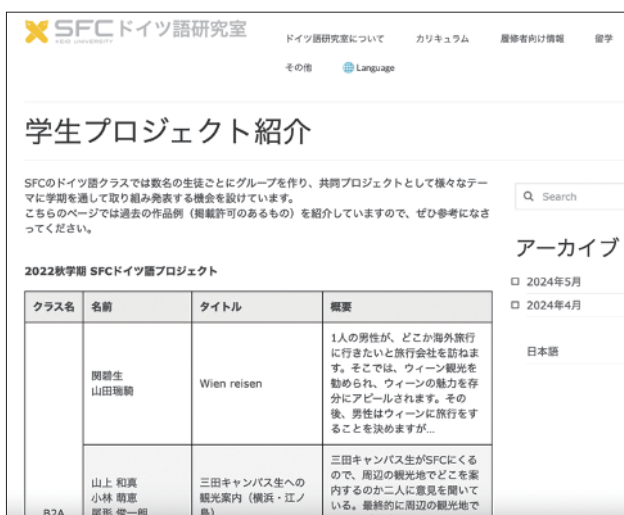


図4 「プロジェクト」の実施例

3.1.2 「ポートフォリオ」の活用による学びの意識化

ドイツ語を使って何をしたいのか、どんな研究活動に結びつけたいのか、という問いは、学習者にとって重要な学習目標として意識化される。初級レベルのドイツ語履修者は各課ごとに「Rückblick(振り返り)」と呼ばれる活動のもと、ポートフォリオを作成する(図5参照)⁹⁾。これはドイツ語で何ができるようになったのか、何がこれからの課題なのかを各履修者が意識化して学習できることを目的としたプロセスである。その際、学習者が目指す目標が特定の領域に関わる研究であれば、それを念頭に自分の現在の能力、そして到達したいレベルの位置付けを意識することができる。学生はこの作業を隔週の頻度で授業時間中に作成し、各自のDropboxに保存した上で、そのリンク先を教員に共有するしくみである。このアーカイブ先には、他にも授業中に作成した「プロジェクト」のための発表資料や調査用紙等が保存される。これによって、各履修者が自分のドイツ語学習履歴全体を振り返ることが可能になる。学習者は、自分が初級段階のレベルで作成した自分の学習活動の記録やプロジェクトの軌跡を時間軸で振り返り、自分の成長を俯瞰することができる。把握しづらい言語運用能力の習熟度が可視化されることで、学習者それぞれが「できること」の幅が大きく変化したことを、学習者自身が認識できる。このポートフォリオの活用は、学習者がドイツ語を



図5 ポートフォリオ「Rückblick」の実施例

より自律的に学習できる状態へと導くと考える。

3.1.3 プロジェクト活動を介した地域研究

ドイツ語教育の中では、初級・中級・上級それぞれのフェーズでタンデム(Tandem)プロジェクトを導入し、日独双方の大学生がグループワークやペアワークなどの協働学習を通じて研究課題に取り組む要素を取り入れている。初級レベルではG3の授業が対象となる。週4回の授業のうち1回分をドイツ語圏の大学とのタンデムプロジェクト活動に対応させ、日独の時差を考慮して開講・運用している。図6は2024年度春学期に実施されたトリアー大学との相互プレゼンテーションの様子である(掲載については日独双方の参加者全員が承諾済)。

テーマはドイツ語圏あるいは日本の都市を対象にしたコミュニティ形成、環境政策、都市計画など、地域研究から社会問題まで、学生にとって現実的な問題を取り上げる。

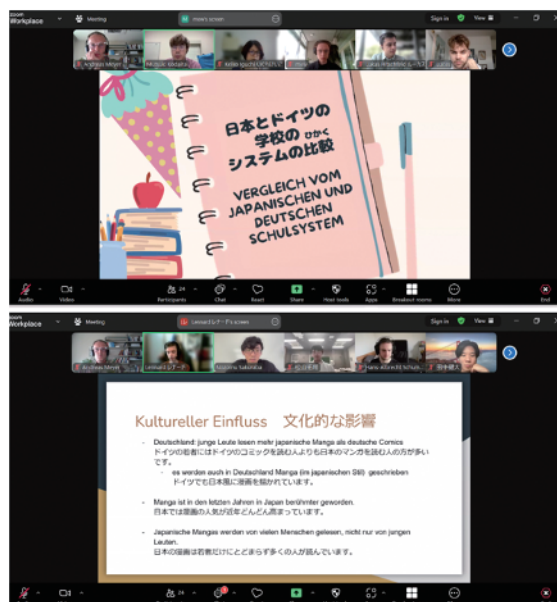


図6 トリアー大学との合同授業とプレゼンテーションの様子

3.2 中上級レベルの言語習得から研究活動への連動：地域研究の視点

CEFR レベル B1-B2 に達する履修者を対象にドイツ語で特定の研究テーマを扱う「ドイツ語講義科目(コンテンツ科目)」が複数開講されている。ドイツ語圏を対象とする地域研究への視点としてまず挙げられるのが「ドイツ語圏地域論」である。例年ドイツ語圏の大学と共同で実施しているこの授業ではドイツ、スイス、オーストリアなどドイツ語圏に焦点をあて、情報収集、口頭発表およびレポート提出までのプロセスをドイツ語でおこなう。テーマの事例としては「欧州における多様な家族の在り方」「ジェンダーについての意識」「大学生の環境問題への意識」「幸福感の

多様性」「高齢化社会における取り組み」「学校制度の日独比較とその背景」「情報社会とフェイクニュース」など多岐に亘る。日本語を母語とするドイツ語学習者と、ドイツ語を母語とする日本語学習者の遠隔システムを用いた合同授業では、日独それぞれの講義担当者がファシリテーターとなり、双方の学生がペアワークあるいはグループワークの形で協働しながら資料の調査活動や分析作業などをおこなう。学期中の双方の履修者によるプレゼンテーションおよび質疑応答はそれぞれの学習言語でおこなわれる。

もう1つの科目例はコンテンツ科目「日独社会研究」である。これは、2000年度春学期以降¹⁰⁾、継続してドイツ語圏の大学と遠隔システムを使用しておこなわれている講義科目であり、現在はドレスデン工科大学およびハレ大学との共同開講を継続している。過去には1ヶ月の期間を対象にしたSFCからの学生派遣、ハレ大学からの学生受け入れを通じた日独フィールドワーク活動もおこなわれた。この活動を通して学生は相互に地域研究の対象地であるドイツ語圏あるいは日本に関連する研究テーマを決め、そのための資料調査や現地での聞き取り調査を日独協働で実施した。それぞれの言語圏で調査対象とする人や機関とのアポイントメント、調査票の作成、滞在地でのフィールドワークに至るまでタンドムパートナー同士が協働で活動するプロセスは、学習言語の習得のみならず、研究スキルの獲得にも有効に働いた。ドイツにおける幼児教育の現状と問題についてシュタイナー教育機関を取材したり、ドイツにおいて第二次世界大戦の戦争体験者への聞き取り調査を実施したりするなど、個人的な人間関係がなければ難しいフィールドワークをタンドムパートナーと協働することで実現できた事例が数多く見受けられる。

4. インフォーマル・ラーニングとしての言語学習

4.1 ドイツ語圏海外研修

ドイツ語圏での活動は春季(2月-3月)および夏季(8月-9月)に各地で開講される研修コースが挙げられる。夏季には約13-15箇所のコース、春季には約6-7箇所のコースが海外研修先の選択肢の対象となる。その大半は現地の州立大学が独自に開催するドイツ語コースである(図7参照)¹¹⁾。学生は自分でコースを選択し、直接現地の国際センター担当者との接触を取りエントリーの準備をおこなう。

ドイツ語海外研修を単位認定の対象とする際、SFCドイツ語研究室では言語学習だけでなく現地の地域を研究の対象として位置付け、現地だからこそ実施可能なフィールドワークを義務付けている。そのための準備を支援するのがスキル科目「ドイツ語海外研修準備コース」である。授業内で学習者は自分のフィールドワークテーマの設定・事前

場所	大学・機関名	応募期限	実施期間
Halle	ハレ大学	TBA	9/1 - 9/26
Trier	トリア大学	6/25まで	8/5 - 8/31
Bielefeld	ビーレフェルド大学	6/30まで	8/5 - 8/29
München	LMU ミュンヘン大学	5/1まで	8/5 - 8/29
Dresden	ドレスデン工科大学	TBA	8/5 - 8/30 8/5 - 8/23 8/5 - 8/16
Freiburg	フライブルク大学	6/30まで 7/30まで	8/2 - 8/29 9/2 - 9/27
Weimar	ワイマル大学	6/15まで	8/7 - 8/31

図7 ドイツ語圏海外研修先一覧(2024年9月1日現在)

の情報収集・現地とのコンタクトをドイツ語で進めていき、準備を整える。タンドムパートナーの人脈維持も重要な助けとなり、ドイツ語学習が、地域研究への動機付けに結びつく。図8は、この海外研修への参加とフィールドワーク活動の実施が遂行されていくプロセスを示すものである。

また、ドイツ語圏で参加対象とする海外研修は、各地域の州政府の支援を受けて運営される場合が多い。一般には非公開の美術館の所蔵物見学、地元企業や農園経営の見学など、地域研究にとって重要なツアーが多く盛り込まれる。これらのフィールドワーク活動も学習者自身の研究活動に影響を与える要素のひとつである。

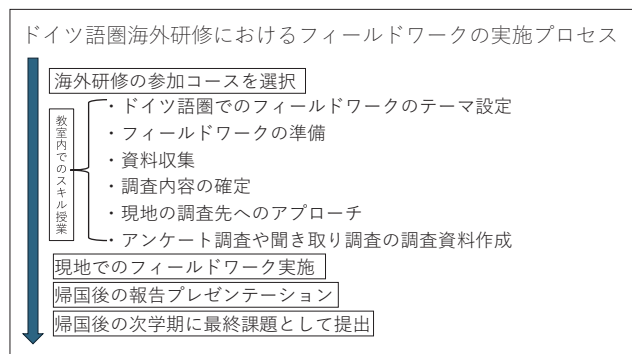


図8 フィールドワーク実施プロセス

4.2 フィールドワークの活用

ドイツ語学習がより専門性の高い研究活動の重要な研究手法として機能を発揮する機会に、「フィールドワーク」および「インターンシップ」と呼ばれる科目が挙げられる¹²⁾。両者は「春季・夏季休業期間中に、学生自身が個々の研究テーマに関連した実地調査や研究活動(フィールドワーク)や就業体験(インターンシップ)をおこない、具体的な成果を上げることが目的」¹³⁾としている。とりわけ前者は、ドイツ語圏でのアンケート調査や聞き取り調査、現場の視察

など、ドイツ語を使って地域研究を遂行する上で学生の自律的研究活動を後押しする位置付けにある。フィールドワーク実施にあたっては、入念な準備期間が必要となる。現地の訪問先との交渉、調査活動に対する同意書の作成、調査票の作成からデータ収集の手段の確定等、すべてをドイツ語で用意する必要がある。その場合、ドイツ語を母語としない学習者にとって協働でプロジェクトに参加するタンデムパートナーの存在がここでも不可欠となる。これまでの地域研究事例のテーマとして「ドイツにおける「統合コース („Integrationskurs“)」から見る移民政策 — ノイケルン (Neukölln) 市民大学での参与観察を通じて」¹⁴⁾が挙げられる。これはドイツにおいて移民受け入れの政府政策の一環として導入されたドイツ語「統合コース」に自ら参与観察者として参加し、現地で複数の履修者に直接聞き取り調査をおこなったものである。夏休みの期間を利用したこのフィールドワークはベルリンの、移民が多く住む地域のひとつノイケルン地区で実施された。「統合コース」に移民としての資格を有しない一学生が参加することは、通常許可されることではない。当時、研究を目的に参加許可を得るための交渉、ドイツ語研究室からの公式な依頼書の発行等の支援を通してフィールドワークの実現に至った。移民を対象にしたドイツ語コースの状況を現場で調査するため、学生は現地で約1ヶ月間コースに通い続け、現場のドイツ語教員とクラスの受講者(つまりは移民申請者)へのインタビュー調査を実行した。このフィールドワークは最終的に学士号取得論文としてまとめられた一つの事例である。

4.3 留学と地域研究

他の言語圏と同様に1年間の留学でドイツ語圏に滞在し、中長期に亘るフィールドワークの実施が地域研究と結びつく事例も見受けられる。慶應義塾大学は2024年度現在18(ドイツ12大学、スイス5大学、オーストリア1大学)のドイツ語圏の大学と交換協定を締結しており、派遣・受入をおこなっている¹⁵⁾。ドイツは学期開始が日本と同様に4月(夏学期)と10月(冬学期)のセメスター制をとるのが一般的であるため、学生にとって留学のスケジュールを立てやすい。

交換留学の他にも私費留学やダブルディグリー制度を利用してドイツ語圏で中長期滞在型の研究をおこなう機会がある¹⁶⁾。過去の代表的事例では、3.11の原発事故をきっかけにドイツ国内で政府政策として推進された脱原発の議論を現地の資料および聞き取り調査を通して実施した研究が挙げられる¹⁷⁾。実際にはドイツおよび米国のメディアに浮上するデータを抽出しデータベースシステムを構築し、データ分析をおこなったものである。この研究の特徴

は、ドイツおよびアメリカでのフィールドワークを通して、独英両言語をスキルにして一連のデータ収集および分析・考察に至る研究活動をおこなった点にある。

5. 考察と今後の課題 — ドイツ語と地域研究

ドイツ語学習が地域研究に結びつく受け皿は、SFCの総合政策学部、環境情報学部、そして政策・メディア研究科で開講される多様な分野の科目群につながる。それは「地域研究」を掲げる科目や研究会と直接的につながるような積み上げ式ではなく、学生自身が言語学習を通して獲得する新たな視点や多様なものの見方に引き寄せる形で、独自性のある研究に発展させることであろう。

ドイツ語には「ランデスクンデ („Landeskunde“)」というドイツ語特有の概念がある。「Land」は「国」や「地域」を表し、古高ドイツ語¹⁸⁾ „kunde“は「知人」「信頼のおける人」を表す „kundo“から派生した名詞である。辞書の訳語では「(国・地方などの)地域研究」¹⁹⁾と掲載されているが、一般的には言語教育の中の重要な一要素として使われる概念で、学習言語の言語圏に特化した地理、歴史、文化、政治、経済等を多面的に把握することを意味する。この概念は他の言語に翻訳することは困難とされており、日本語でも「ランデスクンデ」と表示されることが多い。このランデスクンデをドイツ語授業の中でどのように扱うべきかというテーマは、常に事例研究が多く見られる日本のドイツ語教育研究の課題である。その一方で「地域研究」の訳語には „Regionalforschung“ というドイツ語が充てられる。この言葉は言語教育とは切り離されたコンテキストで使用されることが一般的であり、その言葉が示す内容は、特定の地域を対象に、様々なテーマを多面的に扱うのではなく、特定のテーマに絞った研究を指す。

SFCには、ランデスクンデ的なアプローチで導入される多面的視野を重視する地域研究の要素と、特定の現象や分野に特化した „Regionalforschung“ の性格が強い地域研究のアプローチが交差する研究教育の場がある。ドイツ語の習得プロセスを通して、ランデスクンデから „Regionalforschung“ への連動がより流動的に機能するための意識化が必要である。

注

- 1) SFCの言語教育理念については関口一郎(編)『大学改革と外国語教育 慶應湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦 — 新しい外国語教育をめざして』(1993)に詳しく書かれている。SFC創設時に、従来の外国語教育とは全く異なる理念を発信する場として、SFCにドイツ語をはじめとする7つの言語をインテンシブコースとして打ち立てるに至った議論が具体的かつ詳細に記されている。その他にSFCキャンパスにおけるドイツ語教育に特化した文献として関口一郎(2000)が挙げられる。
- 2) CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)の基準枠におけるレベルを指す。

- 3) Web サイト「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス言語コミュニケーション科目」<https://language.sfc.keio.ac.jp/deutsch/> から抜粋(2024年9月1日アクセス)。
- 4) 以降、本論では「ドイツ語インテンシブ1」をG1、「ドイツ語インテンシブ2」をG2、「ドイツ語インテンシブ3」をG3、「ドイツ語ベーシック1」をB1、「ドイツ語ベーシック2」をB2と表記する。
- 5) SFCのドイツ語初級レベルを対象に開発されたドイツ語教材『モジュール1 (Module 1)』参照。図2はp.40から、図3はp.56-7から抜粋(参考文献を参照)。
- 6) SFCのドイツ語初級レベルを対象に開発されたドイツ語教材『モデル』シリーズ (Modelle1, 2, 3) の中の、『モデル3 (Modelle 3)』 p.74から抜粋(参考文献参照)。
- 7) SFCドイツ語研究室HP掲載のリスト参照：<https://sfc-deutsch.sfc.keio.ac.jp/> 学生プロジェクト紹介/(2024年9月1日アクセス)。
- 8) プロジェクトの概要をドイツ語研究室のHPに掲載するにあたっては履修者全員から承諾を得ている。
- 9) 『モジュール1』の各課に設定(参考文献を参照)。
- 10) SFCでは2000年度春学期以降、ボン大学(2000年度)、コブレツ大学 WHU(2004年度)、ドレスデン工科大学・ハレ大学(2005年度)、トリアー大学(2019年度)と協働授業およびタンデムプロジェクトを実施。
- 11) SFCドイツ語研究室HPから抜粋：<https://sfc-deutsch.sfc.keio.ac.jp/short-term-study-locations/>(2024年9月1日アクセス)。
- 12) 「フィールドワーク」および「インターンシップ」は単位取得の対象として設置されているSFCの特徴的カリキュラムのひとつ：<https://www.sfc.keio.ac.jp/academics/pmei/curriculum/others.html> 参照(2024年9月1日アクセス)。
- 13) 同上「インターンシップ・フィールドワーク」より引用(2024年9月1日アクセス)。
- 14) 池田真梨子(2013)参照：<https://waragai-lab.studio.site/graduation-theses> (2024年9月1日アクセス)。
- 15) 2024年度現在のデータは慶應義塾大学国際センターHP参照：https://www.ic.keio.ac.jp/keio_student/exchange/ex_partners.html (2024年9月1日アクセス)。
- 16) 日独ダブルディグリー制度については2011年度ダブルディグリープログラム募集要項参照：https://www.sfc.keio.ac.jp/files/1771/web_newest_20110420_2011s_halle_anna.doc.pdf (2024年9月1日アクセス)。
- 17) 佐藤友紀子(2018)による博士論文(政策・メディア研究科): “The Function of Christian Elements in the Media: Analyzing the News Coverage of the Great East Japan Earthquake in Germany and USA”を指す：https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO90001001-20185096-0001 (2024年9月1日アクセス)。
- 18) 古高ドイツ語 (Althochdeutsch) は8世紀から11世紀までのゲルマン語の文献に見られる言語を指す。
- 19) 国松孝二編(1998): 独和大辞典, 第2刷, 小学館. p.1385から引用。

ス・外国語教育への挑戦 ― 新しい外国語教育をめざして』三修社。
 関口一郎(2000)『「学ぶ」から「使う」外国語へ ― 慶應義塾藤沢キャンパスの実践』集英社新書。

[受付日 2024. 9. 19]

参考文献

- Hirataka, F., Riessland, A., Waragai, I., Kimura, G. C. (2006) 『Modelle 3, 問題発見のドイツ語』三修社。
- Riessland, A., Waragai, I., Kimura, G. C., Hirataka, F.(2005) 『Modelle 2, 問題発見のドイツ語』三修社。
- Riessland, A., Waragai, I., Kimura, G. C., Hirataka, F., Raindl, M., et al. (2007) 『Modelle 1 neu, 問題発見のドイツ語』三修社。
- Waragai, I., Meyer, A.; Ohta, T. (2024) 『Module 1(モジュール1), Deutsch für Studierende in Japan』Asahi Verlag.
- 池田真梨子(2013)「ドイツにおける「統合コース („Integrationskurs“)」から見る移民政策 ― ノイケルン (Neukölln) 市民大学での参与観察を通じて」(慶應義塾大学 総合政策学部学士号学位論文)
- 佐藤友紀子(2018)“The Function of Christian Elements in the Media: Analyzing the News Coverage of the Great East Japan Earthquake in Germany and USA”(報道メディアにおけるキリスト教的要素とその機能 - 「3.11」をめぐる独・米の報道分析と比較)(慶應義塾大学 政策・メディア研究科博士号学位論文)
- 関口一郎編(1993)『大学改革と外国語教育 慶應湘南藤沢キャンパ

